竹本駒之助 女流義太夫一代記

その7 「合邦」と若太夫師匠の段

【チラシ使用写真】
竹本駒之助二十五歳　新婚当初　難波の高島屋前

今回語らせていただく「摂州合邦辻」の「合邦内の段」は、十代のときにお稽古していただいた十代豊竹太夫夫師匠が得意とされた演目です。催し物でなにかと言われると、「合邦」をおやりになっていました。父・合邦に刺されて手負いになった娘・玉手御前が「道理ぢや、道理ぢや、憎い筈ぢや」と語るところは、裏(声)でやられているのに裏に聞こえない、マカン(一番高い音)でなさっていて、越路太夫師匠は「とても盗むことができない、若太夫師匠にしかできない」と感心されていました。

若太夫師匠はお目が悪くて、どの演目のときにも見台にはいつも「合邦」の本を置かれていました。普通は一枚ずつめくりますが、師匠は、バサッ、バサッとめくられていたのを思い出します。「合邦」はじめ、KAATでこれまで語らせていただいた「和田合戦女舞鶴」や「仮名手本忠臣蔵九段目」などの大きな演目を若太夫師匠の語りで聴かせていただいていたことは、私にとってとても大きな経験です。本番の舞台を何度も聴かせていただきました。やはり本番は戦場ですから、稽古だけでなく本番を聴かせていただいたことが私の宝になっています。

若太夫師匠の五十回忌にあたる今年、「合邦」を語らせていただくことにご縁を感じます。今回は若太夫師匠のことを少しお話ししたいと思います。

若太夫師匠には十五歳のときにお稽古をしていただきました。「一代記その2」でお話ししましたように、十四歳で春駒師匠の内弟子になったものの、あまりに寂しくて「家に帰りたい」と言い続ける私を見て、母が「太夫として立つために文楽のお師匠さんにつけてほしい」と春駒師匠にお願いしました。そして、連れて行っていただいたのが若太夫師匠のところでした。

若太夫師匠の稽古は、いつも本読みから始まります。本読みでは節をつけずに読みますが、大切なのは、段落をつけて語るように読むことです。詞のところ、地合のところ、それぞれをそのようにイメージして語ります。若太夫師匠は発音をとても大切にする方で、「『ん』をつけないように」「発音が汚い」と細かくおっしゃってくださいました。本読みのときからものすごい集中力で、泣き出されてしまうこともよくありました。「もういっぺん読んでくれ」と言われて、読むと泣かれ、「もういっぺん」と言われてまた泣かれ……という繰り返しでした。戦死した息子さんを思い出されることもあったのかもしれません。

若太夫師匠はドラム缶のような巨体でいらして、力(りき)のある、豪快な義太夫を語られる方でした。豪快すぎて、うぉうぉうぉ～とどういう節を語っているのか、そのときの私にはさっぱりわからず、本ブシ、三ツユリ、ユリナガシ…といろいろな節があるのに、ぜんぶ同じに聞こえてしまうのです。師匠は勘のいい方で、私がわかっていないことを察して、「難しいからいまはまだ分からないと思うけれど、よく聴いて耳に残しておきなさい」とおっしゃり、稽古のときから本気で語ってくださいました。当時、端場ものなどはお稽古していただいていましたが、切場の大きなものは、子どもの私に、今教えても一行もやれない、しかし耳に残しておけば、いつか必ず役に立つ、そういう思いでいらっしゃったのだと思います。

ただ、そのとき私は、例えば「和田合戦」の板額(はんがく)の言葉の言い方の違いなど、少しは気づいていた部分もありました。そのことも若太夫師匠は察知してくださっていたのではないかと思います。それで別のお師匠さんについたほうがよいと思われたのでしょう。おかみさんに手を引いてもらって、越路太夫師匠に私のことを頼みに行ってくださったのです。越路太夫師匠は大先輩の若太夫師匠がわざわざ頼みにこられたのでびっくりされたそうで、「度量の広い、すばらしい方だ」とおっしゃっていました。越路太夫師匠は、節の違いや、人物による言葉遣い

や話し方の違いなど、義太夫のいろはを分析するように細かく教えてくださり、そのおかげで私は義太夫のおもしろさに目覚めることになったのですが、今から思うと、若太夫師匠は、そういうことまで見抜いていらして、越路太夫師匠をご紹介してくださったのかもしれません。

「合邦」「和田合戦」をはじめ、「関取千両幟」など大きなものを語る若太夫師匠の語りは他の方と全然違いました。越路太夫師匠にお稽古をつけていただいて細かい違いが理解できるようになってから、あらためて若太夫師匠の語りを聴かせていただくと、そのスケールの大きさと素晴らしさが、さらによくわかるようになったと思います。

越路太夫師匠にお稽古にうかがうようになってからも、当時住吉にお住まいだった若太夫師匠のところにうかがって劇場への送り迎えなどさせていただいていました。あるとき、いつものように手を引いて行き、「三日経ったら迎えに来なさい」と言われてなんだろうと思ったところ、カノジョの家だとわかってびっくりしたこともありました。競馬、競輪、パチンコもお好きで、一度、競馬の券を買ってきてほしいと言われたときは、「私は田舎から出てくるとき、母に賭け事は一切やるなと言われてきましたので…」とお断りしてしまいましたが。まさに「豪快」を絵に描いたような方でした。若太夫師匠が亡くなったとき、私は三十代。最後までお仕えさせていただけたことを幸せに思っております。

「摂州合邦辻」の「合邦内の段」は、若太夫師匠、越路太夫師匠、それぞれにお稽古をしていただきました。合邦は出家していますが、元は身分の高い武士です。ところどころに武士であったところが出てこなければいけませんが、かといって丸っきり武士になってはいけないと思っています。玉手御前は大名の後妻になっていますが、二十歳くらいで、俊徳丸とほとんど変わりません。ここは難しいところで、これは私が思うことですが、美男子の俊徳丸を、玉手は好きだったのではないでしょうか。本当なら浅香姫みたいに一緒になれたのに、それが叶わずとも、母としてでもよいからせめてそばにいたい、という気持ちから、あそこまで大変なことをしたのではないか――そういうふうに思ってもいいんじゃないかなと感じています。お家を救うという大義名分はあったとしても、それだけでなく、俊徳丸に思いを寄せたいという気持ちもあったのではないか。……というより、あったらよいのに、という願望かもしれません。さて皆さまはどう感じられるでしょう。

登場人物は、合邦、合邦の女房、玉手御前、浅香姫、俊徳丸と奴の入平。合邦の女房は、娘・玉手のことを案じる心優しいおばあさんですが、越路太夫師匠にお稽古していただいた三十代の頃は「もっと枯れないといけない」と言われたのを思い出します。玉手はあまり色気があり過ぎてもいけませんし、さりとて後妻さんになりすぎても……と思います。さわりで玉手が本心を語るところは、やっぱりこういう色気があったらいいなと思いながら、語らせていただいています。そしてやっぱり一番大きなお役は合邦ですね。

長丁場の八十分です。お客様は後半、玉手が手負いになってからがしんどいと思われるかもしれませんが、実は、義太夫は手負いになってからのほうが、まだ少し楽です。元気なままいられたのでは、とても八十分はもちません(笑)。ですから前半のほうがしんどいです。うまくできているもので、手負いになってからは息つぎもできますし、持ち直させてもらえます。

「合邦」を語らせていただくのは久しぶりです。いつもどおり、気を引き締めて舞台にのぞみたいと思います。

【写真】二〇十六年九月公演のチラシ

KAAT
KANAGAWA ARTS THEATRE